



## クリーン大作戦に自衛隊も一役

臨元小学校PTA（会長中細藤雄）では、美しい海岸をとりもどそう。と六月二十五日海岸のゴミ集めをしまし

た。

海岸はシケのたびごとに寄せつけられるゴミでいっぱい。この日、同地域で機動訓練

中の第三十九普通科連隊第四中隊（中隊長 淡路一等陸尉）の約四十名が、休止時間を利用して協力を申し入れ、機動

力を生かしたクリーン大作戦を展開しました。おもいがけぬ自衛隊の協力で、海岸のゴミもみるみるうちにたづねられて、もとのきれいな浜をとりもどし、夏には子どもたちを安心して泳がせることができる。とよろこんでいました。

昭和53年 6月号

# 暴走・飲酒運転の根絶

## ■基本的な交通ルールを守ろう

交通事故が最悪のペースで増え続けておりますが、交通事故死に対処するため六月一日「交通死亡事故抑止非常事態」を宣言し、県をはじめ市町村、警察、交通安全協会などあらゆる関係機関とともに交通事故防止運動を全面的に展開しました。



飲酒運転による事故が目立っています  
(十三地区での事故現場)

金木署管内の交通事故死亡者も異常な増加ぶりです、今年に入ってからすでに四名を記録しています。

金木署管内で発生した交通事故死亡者四名の中には市浦で発生して死亡したものが三名もふくまれております。このため、警察では、六月いっぱい「暴走・飲酒運転特別取締り月間」と定めて取締りを強化してきました。

村でも事態を重くみて、交通安全協会支部、その他関係機関団体と一体となり、六月一日から七月三十一日までの二ヶ月間を「特別指導月間」に定めて運動を展開しています。

例年、夏になると交通事故が多発する傾向にあり、特に夏休み中の子どものいたましい事故が相次いでおります。夏の交通安全運動も七月二十一日(金)から八月一日(火)までの十二日間、実施することになっておりますが、村交通安全対策協議会では、交通死亡事故(〇)をめざして村民みんなに参加してもらおうことにしています。

また、事故原因のほとんどが運転者としての基本的な交通ルールの無視、無謀運転によるものが多いことから、運転者ひとりひとりの自覚と、歩行者も基本的な交通ルールを守るよう、強く呼びかけます。

### 愛のひと声運動を

○自分の子どもだけでなく道路であふないことを見かけたら、だれでもすぐ声をかけてやること。

○子ども、とくに幼児からつねに目を離さないこと。

○道路上では遊ばせないようにすること。

## 故三和氏に勲五等端宝章

6月1日自宅で伝達式

故三和仁市郎さんは、昭和四十四年十一月三日勲一等華光旭日章を受章してまいりましたが、亡くなった後に

治次長から長男の三和満さんに叙勲が伝達されました。故三和仁市郎さんは、大正十年一月旧相内村選をふりだしに、昭和四年七月から二十二年三月まで同収入役をつめたあと、推されて村長一期を歴任しました。

は六月一日自宅においてとりおこなわれ、県企画部佐藤上

た功績がみとめられたもので、伝達受章した長男満さんは、語っていました。



叙勲は、佐藤県企画部次長から長男満さんに伝達されました

親善と融和をテーマに

# 第五回村民体育大会

七月十六日市浦中グラウンドで

村民総スポーツと健康。スポーツをとおして村民の親善と融和をはかろう。——をスローガンに、七月十六日、市浦中学校グラウンドにおいて、第五回村民体育大会が開催されます。



堂々の入場行進（第4回大会から）

この大会は、これまでお盆に開催してきたものですが、お盆には各部落とも行事がかなったので、出場選手が少ないうえ、準備等に問題もあり、七月大会となったものですが。

当日は、村内各班の選手一、二〇〇人が勢ぞろいして各競技が展開されますが、すでに各競技種目の抽せん組合せも決り、各チームの好成績が予想されています。第四回大会の優勝は、脇元第一チーム、今大会はこのチームが優勝するかと、各班選手のレベ



## 西北身障者スポーツ大会

七月二十三日市浦中

西北身体障害者福祉連合会（会長・青山又二）主催の第十三回スポーツ大会は、七月二十三日（日曜日）市浦中学校グラウンドで開催されます。大会は午前十時から開会式、選手を代表して奈良良光選手が力強い宣誓をしたあと競技

に入ります。  
主な競技種目  
主メーカ種目  
百人対百人競争・走中及び砲丸投・びんつり競走・町村対抗リレー、西北対抗綱引きなど多種多様。  
この大会に四百五十八の選手が技をきそいます。



行政相談委員の

鳴海さんに感謝状

行政相談委員は、行政に対する困りごと、悩みごとのある人の相談に応じ、その解決を手助けすることが主な仕事です。最近では、道路行政・出かせぎ・交通事故に関する相談が多くなりました。

去る五月二十三日、青森行政監察局長から感謝状を授与された鳴海さんは受賞の喜びを語っています。

鳴海さんは、昭和四十七年四月一日から行政相談委員に委嘱されていますが、そのほかにも、市浦村教育委員会委員長、出かせぎ指導

委員、村福祉協議会理事、老人クラブ会長、児童館長などに受ける相談も多種多様にわたっています。

相談は、「相手の立場を理解して親身にお話することがもともと大切なことだ。」と強調する鳴海さん。

これからは電話・口頭・手紙のいずれの方法でも無料で相談に応じますので、「どんな小さなことでも気軽に相談してほしい」と今日も仕事におわれています。

吉田さん（箱内） 郵政大臣表彰に輝く  
本荘さん（十三）

第四十五回通信記念日式典で、郵政省に奉職、三十年の永年勤続功労者として、十一月七日、相内郵便局に、九月九日、十三郵便局に採用されました。その間、貯金と、十三郵便局の吉田鉄美さんと、十二郵便局の本荘勉さんと、愛される局員をモットーに頑張ってきた功績が認められたものです。

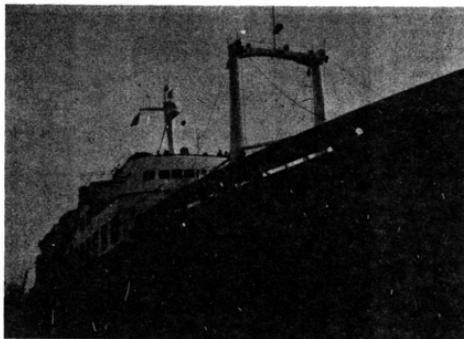
青年の船に乗って

レポート (下)

相内・三浦美智男

楽しかった民泊

ローンの家に民泊することになった私は、日常会話で非常に心配したのですが辞書を引いたりしながら私が納得するまで指導してくれました。



総員379人を乗せた日本丸は、約1万トン全長150メートルの豪華な船でした。

いろいろな指導していただいているうちに、英語への劣等感もなくなり、フイリンで大体の意味がわかるようになってきました。不安だった民泊も今になっては一番の楽しい思い出となっています。

ローンの家族に接して感じたことは、親と子のフレンドシップが非常に強いことを感じました。また、彼らは、娯楽を非常に大切にしていることである。日本では、仕事第一主義であり娯楽は二の次に考えられているようにも思われるのですが、彼らはその逆なのである。

ボールとサヨナラ

二月十三日、羊と世界四大漁場の一つで有名なニュージラランドへ、日本丸はメルボルンを出発しました。ニュージラランド国士は日本の約七十三パーセントの広さで、その首都ウエリントンへは二月二十二日入港しました。

ここでも、スポーツ交換館内公開、課題別視察等でハーランドスケジュールでした。そして私たち五班のO.M.ボールもここでサヨナラです。約一ヶ月間ボールを生活し

て感じたことは、私たちが日本人は全体主義であるのに対し、彼らは個人主義であるということです。だから船内生活のルールを守ることに、彼らは非常に息苦しかったようにも感じられました。

二月二十四日、ウエリントンを出港し、ニュージラランド最大の商工業都市、オークランドへ入港。ここでも課題別視察等を行ない無事寄港地活動も終わりました。ニュージラランドで特に感じたことは、社会福祉制度が非常に発達した国であることでした。老人ホームや身障者等の施設を見学しましたが、入所している人たちの明るい感じが印象に残っています。

三月一日、オークランドを出港し、最後の寄港地のニューカレドニアへ三月四日入港しました。ここは森林、桂の小説「天国に一番近い島」の舞台となるところで、パントラワーの大きな歓迎をうけました。人口十三万人、国土の広さは、四国と同じくらい小さな島で、フランス領土の小さくしています。

言葉も、英語からフランス語となりまし。太陽も暑く、現住民の心も非常に暖かく感じました。入港した夜は、ニューカレドニア青年のタヒチダンスと、日本語との交歓があり、これまでに訪れた国々とは違い、なかなか雰囲気、何となく親近感を覚えました。ここでスポーツ交歓は、新聞、テレビでも大きくとりあげられました。そして、南の本陣を全身にうけての海水浴。

ニューカレドニアは、ニツケルと観光を柱とした島であり、文明に侵されていない自然の国として私の心に強く焼きついていきます。

体験をふまえて、**地域のために**

三月六日、ニューカレドニアの首都、ヌメアを出港。寄港地活動もすべて終了、日本丸は東京晴海埠頭へ向いました。

三月十八日八時、晴海埠頭へ入港。長いようで短かった五十一日間の研修も終了。不安と希望、期待感を感じて参加した「青年の船」事業も無事終わったのです。解団式では、別れの悲しさを忘れていた仲間の涙をよびおきました。

たとえ涙を流さずとも、仲間たちは心で泣いていた。私は、「青年の船」に参加したことによって、日本を再認識することができ、友をもみつくなおすことができました。日本全国から集まった青年たちひとりひとりと友だちになれたこと、消極的な私を積極的にしてくれた「青年の船」。

私は思った……。

村へ帰る、津軽のもつけになろうと。そして、地域住民が、老人、子どもたちが、私たちに青年に今、期待していることを一つやもいからやってやろうと……。

私は「青年の船」に参加して、貴重な体験を得ることができた。

この体験を地域発展のために少しでも貢献していきたいと考えている。

津軽の先住民族



▶ 6 ◀

阿曾部族 ②

豊島勝蔵

津軽人最初の祖先

幾世代にもわたって骸骨をもつぎくような水河期にも増えしのび、息づまのような黄鷹万丈の間氷期をもたえぬけ、津軽にたくましく歩みを進み入れた阿曾部族。いかなる悪環境をも克服して種を残してきた、驚くべき生命力を内に



阿曾部族が生活したという住居

ひそめていられる阿曾部族。これが私たち津軽人の最初の祖先です。

阿曾部一族の名称は、住人の地名から呼ばれたもので、この外にアサベ、ワサベの名称でも呼ばれていたと云うだけども、アソベの名称がいちばん多かったのだと云うので、アソベ族の名称で伝えられたものだと云うので、阿曾部という地名は、「東日流開津物語」に、「田光の竜女嫁入して神となり、山を姫神嶽と云、又白竜の峯とも云、此処年経て次第に谷々の水流れ落て阿曾部の森高くなりて山となり、号て東日流高岳と云、又居住来山とも云、是は居住山の流窟なれば名を移したるなり……或故に人皇七拾貳代白河院の御宇、永保三幸四年、また元年ともいふ、岩木利直正氏の姫安寿の前權現と現じ、阿曾部の森に飛去りて此処

に上り給ふ、其驗有て、阿曾部の森一夜の中に大山となる、号て岩木山と云……」と出ています。

岩木山は阿曾部の森

岩木山に関する伝説を書いた文でなければ、岩木山の前名を阿曾部の森と呼んでいたことにはまちがいがありません。私たちの最古の民族であります阿曾部族が、選びに選んだ、豊かなる土地であります。梵珠の連山や阿曾部の森が土地造成されてから何十万年も経過してはいますので、阿曾部族が移住して来られた当時には、樹木が繁茂し美味なる木の実をつけ、植物も思うがままに葉をばし球根を太らし、大陸から移って来た鳥獣が自由に棲息し、岸辺を流る古津濱には、魚貝類が豊富に増殖して、私たちの阿曾部族をあたたくい両手で抱きかかえてくれたことでありましょう。

住居は自然を利用

阿曾部族の住居は、さまざまでありまして、これは、旧石器・中石器

の時代の狩猟民でありますから、一地区に永久に定住することがなかったためでしょう。アナカといつて、流水の側の山地の傾斜地の大木を利用して、その根本を掘った洞穴、流れの近くの平地に丸太を「U」字なりに積み、その外側を土で固めたヒラカ、自然に生えていた大木を利用して、四角錐のように枝を組み、入口と煙出しをつけ、屋根をカヤや草でつくったヨセなどでよく粗末なものですがすばらしい技術だと考えます。しかも、冬は凍満き処の近くに住居を移したともいわれています。現在の嶽附近でしょうか。

東日流弁 ⑥

(寛政年間 一七八九—一八〇一)

■物称普及通弁

- シニバチ (竹の花) オロ
- チ (酒酔い) チキン (かむり物) カデモノ (味噌)
- ベチナベ (肉肉) チヨケイ (色仕かけ) ゴンボロイ (強情) イボシ (武術)
- ダキ (合戦) イチゴ (薫籠)
- サイモツ (菜菔) ケガツ (肌鏡) バゲ (夜) タマシ (幽霊) コワシド (窓明戸)
- クサイキ (入梅) ケリ (はきもの) ニニゴゴ (にんにく)
- カシロロ (夷地ぬぎ)
- マイネ (出来ぬ) キミウカ
- タリ (遺言) ポツチ (追手)
- オボキ (針箱) ゴロ (あせ道) ツアサケ (かん酒)
- ヒッポ (煙出口) アマケ (壺) メクソオシ (朝仕事)
- ガゴ (岩穴) ナンバ (とうがらし) チチグバル (伏す)
- ゴボヒ (音する底) ヨキ (寝着物) ダンコウヌキ (首)
- 新) チヨウキリ (切腹)
- アレド (加勢)

村史資料編上巻より



第四十九回球算検定試験は六月四日、管内各小学校で行われました。

▽三級 佐藤八重子(相内小) 鳴海敦浩、成田靖子(辻分球算塾)

▽四級 相坂泰弘、相川重久、小倉正三(十三小) 俵谷有知子(脇元小) 丁子谷香(辻分球算塾)

▽五級 相川高樹、中井秀行、渋谷隆一、相川章子、古川郁子(十三小) 竹谷恵美、村元道子、葛西香織(脇元小)

▽六級 相川美栄子、相川恵美子(十三小) 坂本浩倫(脇元小) 安保和穂子、三和俊美(辻分球算塾)

▽七級 秋月広美(十三小) 工藤美加、奈良武文(辻分球算塾)

▽八級 奈良みき子、豊島静子、工藤久美子、浜田宏一郎、小倉礼子、若山馨(十三小) 葛西裕教、葛西ひろ子(脇元小) 澤田真奈美(辻分球算塾)

暑中見舞用ハガキを発売しています

涼爽感にあふれる夏の風物画で美しい四色刷り、友とあなたがたの心のふれあい、厚情を深めることに役立っています。

「あじさい」「おひさま」を裏面図案化した種類の暑中見舞用ハガキが七月一日から各郵便局で発売されています。

献血はあなた自身のために

人に頼らず、自分自身の力で生きて行く……。そう心に決めても、長い人生、思わぬ出来事で人の助けを受けることが必ずある。お互い持ちつ持たれつ、けつして一人ですらして行けるものはありません。

うした人と人のきずなを、心から理解している人が行う最も人間らしい行為、それが献血ではないでしょうか。市浦村の献血状況は三年連続青森県一位、九年間連続して目標達成という成績をおさめています。あなたの献血への心づくしは人々にしあわせの輪をひろげます。今年第一回目の献血日程は次のとおりになりました。万一の災難にそなえてぜひ献血を!

献血の日時と場所

とき	ところ	じかん
7月13日	相内児童館前	13:30~14:30
	市浦営林署前	14:40~16:00
	太田センター前	16:20~17:30
7月14日	脇元公民館前	9:00~10:00
	磯松公民館前	10:00~10:50
	十三公民館前	11:00~12:00

■お断り  
歯の健康シリーズは、スペースの関係で次号へ掲載することになりました。

でご了承願います。

(編集室)



編者室から

虫おくりの太鼓の音が遠く、夏は、一足飛びにやってきました。そして、海に山にこのたより、をなによりの楽しみに待つていくべきです。さて、「広報しゅうら」は毎月二十日発行と決められているのですが、広報担当者が夏休み、何をどう割りつければよ

いのか、迷つてしまひ広報編集のむずかしさを感じているこの頃です。いろいろな事情もあつて定期発行はなかなかみずかしいのですが、出かせぎ先で「村のたより」をなによりの楽しみに待つていくべきです。さて、「広報しゅうら」は毎月二十日発行と決められているのですが、広報担当者が夏休み、何をどう割りつければよ

いのか、迷つてしまひ広報編集のむずかしさを感じているこの頃です。いろいろな事情もあつて定期発行はなかなかみずかしいのですが、出かせぎ先で「村のたより」をなによりの楽しみに待つていくべきです。さて、「広報しゅうら」は毎月二十日発行と決められているのですが、広報担当者が夏休み、何をどう割りつければよ

わくわく

- 佐々木雅幸(相内)
- 根本 孝子(福島)
- 藤田 純治(磯松)
- 中村ちづ子(脇元)
- 長島 文明(青森)
- 三上 裕子(相内)
- 吉田 均(相内)
- 阿部 信克(相内)
- 三和 篤子(相内)
- 小山内三紀子(金木)
- 柴田 昌彦(東京)
- 成田礼美子(脇元)
- 佐々木 博(車力)
- 三上 七重(相内)
- 山田 淳司(脇元) 2歳
- 成田 君子(脇元) 56歳
- 山田 さた(相内) 81歳

